

詩人『宮城賢』

みなさんは、宮城賢という詩人をご存じでしょうか。生きるとはどのようなことを問い続け、病による死の恐怖と闘い続けた人。

今回、宮城さんと親交のあった藤坂信子さん(詩誌「アンブロシア」主宰日本現代詩人会会員)にご協力いただき、氷川町出身の詩人宮城賢さんをご紹介します。

逆境を生き抜いた詩人

「宮城賢」

「藤坂 信子

山紫水明という言葉は氷川町の形容にぴったりです。私は昔、和鹿島と呼ばれた村の出身で氷川の川上にある宮原は堤防を歩いてよく出かけていた懐かしい町です。

さて、『戦後詩一〇〇選』(思潮社)に出ている詩人・宮城賢は旧宮原町で生まれています。雲のように群がる戦後の詩人たちから選ばれたすぐれた詩人の中に我が氷川水系の詩人が加えられていることは何と名譽なことでしょう。その宮城さんは、縁あって私が熊本市で編集発行している同人詩誌「アンブロシア」に加わり、最晩年の六年間というもの実に精力的に詩やエッセイを書いていました。悲しいことに昨年の三月に傘寿を目前にした七十九歳



▲氷川の前にて

で東京近郊の所沢市において帰らぬ人となりました。首都圏では著名な宮城さんが出身県では殆んど知られていないことに気付いた私は事あるごとにその名を口にしてきました。この春は友人たちを誘って宮城さんを偲びがてらに氷川町のひな祭り展に出かけました。古い立派なお屋敷を開放してびっしり並べられたひな人形を拝見して、町の文化はこのようにして伝えられていくのだなと感慨を深くしたことでした。

宮城さんは一九二九年(昭和四年)生まれです。十人兄妹の末っ子でしたが兄妹の多くが幼い頃に結核で亡くなり、成人したのは四人だったといいます。宮城家の結核は後に詩人の人生にも暗い影を落とすこととなります。宮原尋常高等小学校に入学したのは一九三五年、旧制の県立八代中学を経て得意の英語を更に学ぶべく東京外国語大学英米科に入りました。卒業後は、貿易会社や出版社に勤めましたが、数年後に独立して自営翻訳業に転じ、生涯その道を歩いたのでした。仕事の内容は特許出願の英訳で、常に迅速的確な翻訳が求められる暇なしの厳しい日々だったため帰郷もままならなかったのではないのでしょうか。

すっかり結びついていることです。それも特定の思想や組織を持つていない人たちの生活ではなく、頼りにする何ものも持たない私たち一般大衆の生活から想を得ているのです。宮城さんの作品を読むと戦後間もなく地方から上京した者が東京でどのように生きねばならなかったかがよくわかります。強い者に巻かれず、弱者にやさしいのが宮城さんの詩です。私は宮城さんほど自分を裸にする勇氣を持った詩人を知りません。宮城さんは、言葉が美しいだけでなく内容(心)のない詩をとて嫌っていました。

特徴のもう一つは、批評精神です。悲惨なテーマの詩でも対象に溺れない目で描かれています。何と勁い精神でしょう。この勁さで一日一篇は詩を書くことを自分に課し、その習慣は重病(胃癌)に罹ってからもぎりぎりまで続けられました。死の半月前に書かれた詩「傘寿から惨寿へ」を読むたびに私は宮城さんの壮絶な生涯を思い、それしきで負けるなど励まされます。

宮城賢さんは郷土の誇りです。ご冥福を祈るとともにその名を記憶したいと願っています。

次ページで宮城さんの詩をご紹介します。数多くある中のほんの一部です。ほかの作品も読んでみたいという方は、総務振興課広報係までご連絡ください。☎6212317(直通)

『亡郷歌』

かつては都会を羨望し
いまは故郷を夢みる病むあなたに
十年の不在のちに訪れた故郷から
私は告げねばならぬ――
永い都会生活があなたに
故郷について育てた美しい神話は
それが空しい神話にすぎぬと

わが町の明るく変った部分は
いちはやく人目を惹く場所を狭く占め
訪れる者に笑顔をふりまいて
埃のひどかった道路は完全に舗装され
冷房つきの快速バスを滑らせ
道の両側には見知らぬ小都会が並ぶ
その新しい住人たちは
かれらの進歩！を確認するために
都会からの帰郷者に感想を求めて話しかける

また私は町の古い部分を歩いてみる
そこには昔ながらの
沈滞とも閑静ともつかぬ空気が
ほとんど荒廢の寸前でやと支えられ
こども人々は一様に
〈都会〉を羨望している
そうしてそれが生き甲斐であるかのように
一介の帰郷者に対してさえ
かれらの不遇を説いて倦まない

かつては都会を羨望し
いまは故郷を夢みるあなたに
また私は告げねばならぬ――
空はかく青く水はかく清らかといえども
遙かに海を望む丘上の墓地に
かつて繁かった人声は聞えず

『蝶』

蝶よ
おまえは美しい少女だ
一夏の短い生命(いのち)のために
おまえの美しさは与えられてあるのだ

ぼくが十三の夏だった
ぼくの目の前で
一人の美しい少女が死んでいった
おまえはあの少女だ

少女は十六だった
そして少女は死んで行った
十六歳のばら色の叡智にかやみ
花のように微笑しながら
ただひとことさようなら！と
それだけで充分な言葉のように――
あゝ美しく生まれた者は
言葉少なに別れを告げるのだ

蝶よ
おまえといっしょに
ことしもあの美しい十六歳の少女が
ぼくの心にとんできた

『誤解』(ある新婚生活から)

夕餉がすんで男は本を読みたくおもい
そうするには室内が賑かすぎるとおもい
手を伸ばしてかれはラジオのスイッチを切る
その指先には意味なく震える微かな殺意を
妻の眼が咎めている
(どうしてお切りになったの！)

すると男の指先に殺意は頑なさをまし
茶の間は急にひっそり冷えてしまう
男は本をひろげる
買ったばかりの新刊書の真っ白いページ
そこにはしかし
息絶えて動かなくなつてしまった
無数の小さな昆虫の屍！
のような活字しかない……

男の眼はもう何も見ない
悪意が仕掛けた敏感な盗聴器のような耳
それは俄かに感じられる戸外の沈黙(しじま)の中から
どんな微細な物音をも記録し始めている
(もう一度ラジオをつけてみようか)

しかし指先に残る頑なな殺意が
男のそんな心変わりを打ち消してしまふ
いつしか妻は夕刊をひろげている だが
その顔を遮っている新聞のそこには
かれが本のページに見たよりももっと多くの
小さな昆虫の屍が散乱しているのを
男は当然のようにはつきりと感じる

その夜おそくに
かれらの隣から洩れてくる妻の言葉は
ある意外なことをかれにおしえていた
あのとさうラジオは
もうかれが十年も見ないかれの故郷の
ほたる狩りの模様を告げていたのだと

『傘寿から惨寿へ』

傘寿から惨寿へ
突然変異した
きのふの朝のことだ
突然朝食を食べられなくなったのだ
食欲がまるきりなくなつてしまつたのだ
シリアルにミルクをぶっかけ
オーヴンで温めて食べる
ただそれだけの朝飯を
胃が受け付けなくなったのだ
そしてそれは今朝もつづいた
食欲がまるで湧いてこないのだ
こんなことがあつていいものか

それでも無理強ひをして
口に入れた
胃は何とか受け止めてくれたが
美味いといふ感覚が全然ない
厭々ながら口に運んでいる感じ
われながらひでえもんだと思ふ
それでも妻の手が懐かしい
あの細長かつた指が懐かしい

わが家では今夜は牛肉料理だ
料理は二男に委せてある
かれはいろんな肉料理を作れるからだ
わたしはさうはいかぬ
今宵わたしが食べられるかどうかかわからぬが

お父さん、もうちょっとの辛抱よ
そんな妻の声が聞こえる
ああ、さうだといけどな
さうだよ、さうと
妻には生者には見えぬものが見えるらしい
死者は偉大なものだ
さう思ふと食欲が少し出てくる
うれしいことだ！